

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

はんぶんこ

美川中学校二年 橋野 倫奈

受賞の言葉

今回、生まれて初めて優秀賞という大きな賞を頂き、とてもうれしかったです。元々、自分の考えを文章にするのが苦手だったので、すごく自信がつかまりました。これからは、いろんな表現技法を使って、くわしく伝えていきたいです。

「フミおばちゃん、モナカ一個ちょうだい！」
店内に二人の声が響き合う。

「ハイよお、いつもありがとね。」

そう言つてモナカを渡し、それと引きかえに私達は五十円ずつフミおばちゃんの手の平においた。

「こちらこそいつもおいしいモナカをありがとう！またいつかくるね。」
そう言つて手を振りながら『横田屋』を出て店のすぐそばにあるベンチに二人並んで座つた。

「っさ！早く食べよつか！」

パキツ

中に入っている板チョコが割れると同時にその場は甘く香ばしい香り
でいっぱいになった。

「ハイ、半分っ。」

半分に分つたモナカを優子に渡し、二人で仲よくちびちび味わいながら
食べた。

「そういえばさ、あと一ヶ月したらもう駅伝だね。」

「うん。今年は長距離にさちと響子という期待の新人が入つたからねえ。
ホント優秀ねえホウじゃない!？」

私はでかい口でモナカをほおぼりながら、興奮して言つた。

もう、今年は本当にメンバーがそろつている。つて自分で言うのもお
かしいけど、本当に今年は優勝できそうなチームだ。さちと響子は元々
陸上クラブに入っていたらしく、この地域の大会では一年生の中でもト
ップクラス。それに私達もただ長距離を走ってきたわけじゃない。七年
前、私と優子の姉達が成しとげた優勝という栄光を復活させるために、
毎日つらい練習にも耐えてきた。

練習量ではどの学校にも負けない自信がある。

それほど駅伝には力を入れて頑張つていた。

しかし、駅伝まであと二週間という時に、優子の様子がおかし

なつた。

「ごめん、先行つて。」

と後ろで走っているさちと響子に前をゆずり、苦しそうにどんどん遅れ、
私達と離れていってしまうことが多くなつた。

今年は優勝をねらえるメンバーなのに、優子に足を引っぱつてもらつ
ちや困る。苦しいのは優子だけじゃない。私もさちも響子もつらい練習
を乗りこえて頑張つているのだ。つらいのはみんな一緒。私はそれを優
子に分かつてもらいたかつた。

「ねえ優子、最近途中であきらめてしまつていけるけどさ、つらいのはみ
んな一緒なんだから、優勝目指して頑張ろうよ。」

と優子にやさしく言つた。そうすることで優子にやる気を出させ、また
前のように最後まで走り切つてくれると思つた。

すると優子は、

「うん…。ごめんね、なんかみんなの足を引っぱつちやつて。明日から
は必ずついていけるように頑張るから。」

と申し訳なさそうに言つた。

しかし、駅伝大会まであと七日だというのに、まだ優子は練習につい
ていけなかつた。このままだと本当に優勝は難しくなる。さちと響子が
入つて長距離はパワーアップし、七年前の栄光の時代を復活させるチャ
ンスが来た。それなのに優子はそのチャンスをこわそうとしている。も
つと私達チームのために頑張ろうと思わないのか。つらくてもそれを乗
り越えようと思わないのか。

駅伝がじわりじわりと近づいてくるごとに優子に対しての不満が大き
くなつた。

「ねえ優子、駅伝まであと一週間だよ？もう時間がないんだよ？つらい
のは分かるけど私達もつらい練習を乗りこえて頑張つてきたんだからさ
優子も死ぬ気で頑張つてよ！このままじゃ優勝できないよっ!!」

優子に対して強く言つた。優勝じゃなきゃあの栄光の時代には戻せない。

優勝のために私達はずっと汗水たらして頑張ってきた。

優勝できなかったら優子のせいだ。

すると優子は、

「…ごめん。…ごめん。…本当にごめんね…。」

とあやまりだした。あやまるくらいなら、練習以外にも自分で自主練習でもっと走りこんでほしい。そう、優子には「努力」が足りないのだ。

それからの優子はいつもの練習に最後までついていけられるようになった。走っている最中、三十秒もたない内からゼーハー言い出して、顔もやまればみたいになりながらも必死に走っている優子を見て、すごく感激した。優子はやればできるんだ。

そう胸は高まり、優勝への期待はふくらんでいった。部活の時間以外にも一位でゴールする場面を想像して、思わずニヤけてしまうこともあった。それほど駅伝が楽しみだった。

しかし、大会二日前になって、思わぬ出来事が襲った。

「イタツツ…!!」

後方で走っている優子の口から、今まで聞いたことのない痛烈な叫びが聞こえた。後ろを振り返ると優子が膝をおさえて倒れている。

「優子先輩、大丈夫ですか!？」

さちと響子は優子のそばにかけより、心配した顔でわたわたとあせっている。

しかし私は二日後の駅伝のことが心配だった。優子が出れなかったら他の代わりはいない。もし優子そのまま出られなかったら私達も出られなくなる。今まで苦しんで頑張ってきた練習が水の泡だ。私は駅伝に出られないかもしれない不安で、その場にただ茫然と立ち尽くし、倒れている優子を見つめることしかできなかった。

次の日の朝、優子はサポーターをつけながらも、足を引きずって現れた。それを見て、さちと響子は一目散に優子のもとへかけつけ、肩をかしに行ったが、私は何も助けようとしなかった。引きずっているのが演

技であってほしかった。

しかし、私の願いは優子の言葉であつという間にかき消された。

「昨日病院に行ったらね、オスグット病って診断されたの…。当分走ったらダメって言われてね…。」

優子は言葉をにしながら柚木の言葉を言った。

「明日の駅伝には出られなくなったの…。…本当に本当に、みんなごめんなさいっ!!」

そう言っつて優子は頭を下げた。

「っえ…!？」

：出られないの？つてか本気で言っつてんの？優子が出られなかったら誰もいないじゃん。…つてことは私達みんな駅伝に出れないつてこと…!？頭を下げたままの優子を見ていると怒りしかわいてこなかった。

「…私達は駅伝で優勝するために毎日毎日つらい練習頑張ってきたんだよっつ!!なんで今さら優子とその夢をブチ壊すのっつ!？」と優子に強く当たった。

「それでも優子はごめん…。…ごめん…。…」

と今にも泣きそうな顔であやまるばかり。私はウヤムヤした気持ちで「もうイイ…。」

と言っつてその場を立ち去った。

私はいつの間にか家に向かつて歩いていった。駅伝に出られないと知っつてからもうやる気が出なかった。今までの努力は何だったんだろう？私達の夢は優子によって取り壊された。

なんともやるせない気持ちをごどこにぶつけたらいいのか分からず、苦しみながら歩いていった。

すると『横田屋』が近づいてきて、店の外ではフミおばちゃんが打ち水をしていた。

フミおばちゃんは私に気づいて

「あつ、みなみちゃん。」

と手を振り、笑いかけてくれた。

私はその笑顔に応えようとしたけれど、どうしても顔が引きつってしまっただ。

それでもフミおばちゃんはそれに気づいていない様子で「モナカ食べてく？」と私を店内に導いてくれた。

店内に入るとフミおばちゃんがモナカを持って「はい、今日は特別っ。」と私に差し出してくれた。

パキッ。

「…っあ。」

思わず半分に割ってしまった。いつもなら隣に優子がいて、半分こにし、二人で一緒に食べていた。でも今日は隣に優子はいない。なんだかすごく恥ずかしくなった。

「フミおばちゃん、半分食べる？」

と間違えて割ってしまったモナカをフミおばちゃんにあげた。でもフミおばちゃんは、

「いいよお。自分の店で売っているものを人前で食べるって恥ずかしいよお。」

と言って、結局私がモナカ丸々一個食べることになった。

香ばしいモナカに甘いバナナ。その中に板チョコがアクセントになっていてすごくマッチングしている。食べていてすごくおいしく感じるけど、優子と半分こにして食べた方がものすごくおいしかったように感じた。

私がモナカを半分食べ終わると、フミおばちゃんがふと昔の話話を話した。

「そういえばさあ、みなみちゃんと優子ちゃんはここで初めて会ったんだよねえ。」

フミおばちゃんが目を細めながら、なつかしそうに話し出した。

「二人ともお母さんと一緒に来ていてさ、みなみちゃんはレジの横で、

優子ちゃんは店の入り口で、二人同時に『モナカ食べたいっ!!』でダダこね始めてね。」

フミおばちゃんは楽しそうに笑いながら話している。

「でもその時のモナカは運が悪く残り一個。おばちゃん失敗したなー…って思ってたね、ホントその時の二人には申し訳なかったよ。」

フミおばちゃんはどこか悲しげに言った。

「でもね、やっぱり二人にモナカを食べさせたかったの。だからダメもとで二人に『一緒に仲よく半分こはダメかな?』って聞いたらさ、二人

ともパアッと笑顔になって『うんっ!』って言ってくれてさ。」

フミおばちゃんはひまわりのように私に笑いかけた。

そう、私はその時ラスト一個のモナカがキラキラと輝いて見えて、すごくすごく食べたかった。ふっう、一個だけだと地味でシヨボク見える

だろうけど、その時の私には「一個」という存在が主役のように思え、スターのように見えた。

だからそのラスト一個のモナカの半分だけでも食べられたのがすごくうれしかったし、おいしすぎて二人とも十秒もたない内に食べ終わった。

「もーその時の二人の食いつぷりと言ったらまー豪快でねえ！見ているおばちゃんもびっくりしたよ。でも何より二人が笑って楽しそうに話している姿がすごくうれしかったなあ。」

フミおばちゃんは話しながら笑っていた。

私もうれしかった。初めて会った優子といっぱい話して友達になれたことがすごくうれしかった。

「だからねえ、ここがキツカケで今でも仲よく親友でいてくれるみなみちゃんと優子ちゃんを見ていると、ついつい自分が誇らしく思うんだよ。」

とフミおばちゃんは照れくさそうに言った。

…なんだかフミおばちゃんが私達のことをすごく

大事に思ってくれているんだなあ…と思うと、私もすぐうれしくなってきた。

「だからさ、これからもずっと仲よしでいてくれたら、もうこの上なくおばちゃん幸せだよ。」

とフミおばちゃんがニコツとほほえんだ。

でも、もう優子とは仲よくできる自信はない。

フミおばちゃんには悪いけれど、もう優子と二人でここに来ることはないと思う。

だからフミおばちゃんがうれしそうに笑えば笑ってくれるほど、私の心は暗く、複雑な気持ちになっていった。

「そういえばさ、」

フミおばちゃんは急に思い出したように話し出した。

「優子ちゃんね、ここ一ヶ月すごい頑張っていたんだよ。」

「っえ？」

駅伝が近くなるにつれて、優子はどんどん練習についていけてなかった。だからもつと努力してほしかったし、全然努力してないと思っていた。だけど……。

「毎日毎日この周り二キロをぐるぐるぐるぐるずっと走りこんでいてさ、もう途中で足壊してしまうじゃないかっていうくらい走っていてね。」

ある日優子ちゃんに『なんでそんなに頑張ってるの？』って聞いたならね、優子ちゃんとびっきりの笑顔で『一か月後に駅伝があるからさ、みんなの足を引っぱりたくないんだ。』ってはりきっていてねえ。」

フミおばちゃんは遠い日のように思い出して笑った。

……優子がそんなに頑張っていたなんて知らなかった。何も見ていないのに「努力していない。」と勝手に決めてしまっていた。

……もしかしてあのケガも頑張りすぎて痛めてしまったのかな？

……優子は私のせいで駅伝に出られなくなつたのかな…？

考えれば考えていくほど、私は自分を追いつめていった。

「でもね、」

フミおばちゃんは、急に真剣な顔になって言った。

「大事なのは結果よりも、みんなのことを思いやって、みんなのために努力する。チーム“ ”になることが一番なんだよ。」

フミおばちゃんは、そう言って私にほほえんだ。

：“チーム“ ……。私は優勝のことしか考えてなくて、優子のケガを心配できていなかった。私はみんなじゃなくて自分のことしか考えていなかった。

優子は“チーム“ になるうとしてくれたのに、私がそれを壊してしまった。

なんて私は優子にひどい事を言ってしまったんだろう…？

「ごめん、おばちゃん。」

いきなり立ち上がった私に、フミおばちゃんは驚いた。

「どうしたんだい？」

「ちよつと行って来るっつ。」

そういつて私は『横田屋』の戸をおもいっきり開け、風のように道路を走っていった。

ピンポン

明るいチャイムが玄関に響く。

「はい。」

……ああ、優子の声だ。

どうしよう、どんな雰囲気で行ったらいいのかな…。

「み、みなみ、です…。」

ガツガチガチの私の声に対して、優子はすぐさまドアを開け、

「どうしたの!？」

と驚きながら言った。

「あのさ、」

優子は私の目を真っすぐ見ている。

「本当に、ひどい事言っでごめんっつ!!」

優子が陰で頑張っていたのを何も見ていないのに「努力してない」と勝手に決めつけていたこと。優勝のことしか考えてなくて、優子のケガを心配してやれなかったこと。「チーム」を自分が壊してしまったこと。

さまざまな思いをこめて頭を下げながら言った。
すると優子は

「何でみなみがあやまるの!？」

と困った顔であたふたしていた。

「私がケガしてなかったら、こんな事にならなかったのに…。悪いのは全部私っつ!! 本当にごめんねっつ!!」

と優子も頭を下げてあやまりだした。

ケガした優子が一番つらいはずなのに、何で私のせいにしなideくれるのか…。

優子が優しくすぎて、いつの間にか自然と涙がでてきてしまった。

「…っわ!!っえ、何で!?!っえ、どうしたの!?!なんかごめんっつ!!」
と優子が今にも泣きそうな顔になっている。

なんだかその顔を見ると、私の心がどれだけ優子の心とかけ離れて、どれだけ寒く、薄暗いところにあるかを実感した。

でも、だからこそ、今度は私が「チーム」を築いて、優子の心に近づいていきたいと思った。

そして、大人になっても優子と二人でモナカを半分こにして、いつまでもいつまでも仲よく親友でいたいと心から思った。

